

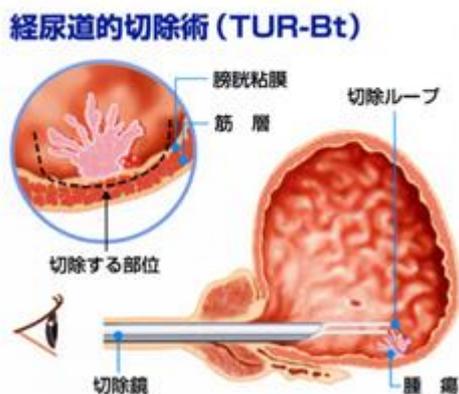
【経尿道的膀胱腫瘍切除術（TUR-Bt）】

膀胱癌は、膀胱壁の筋層に癌細胞が達していない筋層非浸潤性癌と筋層に達している筋層浸潤性癌、転移を伴う転移性癌とに大別されますが、膀胱癌の診断ならびに治療を目的に経尿道的膀胱腫瘍切除術が行われます。

（１）方法

入院にて、麻酔下に行います。

- ①ループ状の電気メスを装着した内視鏡を外尿道口から膀胱に挿入します。
- ②膀胱内を観察し、腫瘍を膀胱筋層の一部を含めて切除します。
- ③悪性の可能性がありそうな発赤部位や、正常にみえる粘膜も数ヶ所採取（生検）します。
- ④手術の状況によって、術後に持続的に膀胱内を洗浄する場合があります。
- ⑤術後は血尿が落ち着くまで尿道カテーテルを留置します。



「泌尿器科 アトラスボード（吉田修監修 バイエル薬品提供）より転載」

（２）期待される効果とその限界

・筋層非浸潤性癌で悪性度が低く小さな病変の場合には、この手術だけで根治する可能性があります。しかし、再発率が非常に高く、多くの症例で複数回の手術が必要になります。

・筋層浸潤性癌/転移性癌の場合には、この手術だけでは根治できませんので、膀胱癌の状態に応じた追加治療が必要になります。

(3) 合併症

- ① 出血：いかなる手術においても予想される合併症です。
- ② 膀胱穿孔：小さなものは自然に閉鎖しますが、大きなものは開腹手術での修復が必要です。
- ③ 後出血：術後、病室に戻ってから、あるいは、退院後 1 か月頃に出血する（血尿になる）ことがあります。出血の程度により安静期間の延長や処置（膀胱洗浄、再手術（止血術）が必要になる場合があります。
- ④ 発熱：尿道、膀胱、腎臓、前立腺、精巣上体などに細菌が入り発熱することがあります（程度により通院～入院の処置が必要な場合があります）。
- ⑤ 排尿障害：術後、膀胱に留置した尿道カテーテルを抜去すると、排尿時痛、頻尿、排尿困難等が発生することがあります。
- ⑥ 以下、手術の一般的な合併症
 - ・術後疼痛：必要時、鎮痛薬を使用します。
 - ・血栓塞栓症（下肢静脈深部血栓症、脳梗塞、心筋梗塞（狭心症を含む）、肺梗塞など）：血管の中で血栓ができることが原因と考えられています。術中術後、下肢をマッサージしたり弾性ストッキングを使用し予防に努めます。